随想

カット／庄野予侑子

椋の樹

庄野　予侑子
〈版画家・春陽会準会員〉

昨夜来の雨で、我家の裏を流れる高座川は濁流となってしぶきをあげています。川の響きは河岸の深緑に吸い込まれて、心持良い川風が吹きぬけます。睡気に誘われた意識の中に、先程から、とぎれとぎれの不協和音が聞こえます。

「ああ、蟬だ…。」

今年も梅雨明けを待ちやらずの蟬の初音です。

2階にある私の部屋の前に、一本の椋の樹があります。眼下の水辺の際から大きく伸びて、窓を覆うように緑をつけています。冬にはすっかり葉をふるって、わずかの枯葉と、蓑虫がわんさとぶら下がり、5月、新緑の目にも痛い頃には、そろそろ毛虫のお出まし!!この樹には黒い小粒の実がなるので、野鳥にとっては虫やら果実やら食料の宝庫です。で、名も知らぬ小鳥達が年中窓辺を訪問してくれます。澄んだ鳴き声は涼味を呼び、かわいい仕草は心をなごませてくれます。圧巻は、あと数日もすれば見られるであろう玉虫の乱舞。数10匹の玉虫が虹色の羽に黄金の陽を浴びて、一樹の元、ゆうゆうと周遊飛行です。それはまるで、虫のお姫様達が優雅に無邪気に戯れている様子。お姫様を網ですくって錦の薄衣はつくれぬものだろうか。薄衣といえば古典文学では蟬の羽やぬけ殻に例えるけれど、蟬ではたよりなくはかないという風情には少し乏しいかなあ。なんて、由無き思いにふけってしまいます。

先刻来の蟬の声は、対岸の樹々の奥からでしょうか。やがて、目前の椋の樹の根元地下深くからも、蟬の幼虫が幾と瀬もの闇を裂いて地上の夏の闇に這出づるのです。しらしら夜もあける頃、ようやく固い殻を脱ぎ捨てて、地上の朝霧のもと初めて身を晒します。想像するだに興奮するではありませんか。生命を讃える如くに鳴きあかした蟬は、数日後、骸と化して土に還ってゆきます。

虫や花は在るがままの姿に満ち足りて在る、と人の目には写ります。欲望の動物である人間は、時に目を洗われるような思いで彼等を眺めます。ふと、青春時代に読

ギャラリー神戸時代で開かれた個展のオープニングパーティ

んだ辻邦生の『夏の砦』をなつかしく思いおこしました。

椋の樹の根元には蛇も見ました河鹿も鳴くし、蛍、蝶、蛾、百足、その他為体の知れぬ生物がシダの葉かげに、岩陰に、水底に棲息しているはずです。眼下に川は流れて、夥しい生物達の生死流転があります。

我身も、先は皆同じ流れを如何様に流れてゆくのか流されてゆくのかと、ちょっと夏の夕暮れの感傷です。

シュートは男顔負け

清水　万帆

〈神戸FCレディース主将〉

女子サッカーの全日本チームが今回初めて結成され、6月7日～19日、香港において開かれた「第4回アジアカップ女子サッカー大会」に出場しました。参加国は、台湾、タイ、インドネシア、日本、香港、フィリピン、インドの8ケ国で、各々2つのリーグに分かれて予戦を行い、上位2チームが決勝トーナメントに進出し、優勝を争いました。

初戦は一万五千人の大観衆の中今回3年連続優勝を達成した台湾と対戦し、前半GKの好プレーとバックスのねばりで0：0に押えながらも、後半おしくも一点をとられ、敗退しました。また、第2戦では、今回準優勝のタイと対戦し、シュートチャンスが生かせず2：0でやぶれました。第3戦のインドネシア戦では1：0で初の勝利をおさめ、決勝リーグ進出こそなりませんでしたが、初めて国際大会に出場した日本に対して、よい評価が得られました。しかし、台湾、タイチームのサッカーのレベルの高さと、人々の関心の深さには、日本の女子サッカーの遅れを痛感しました。

第2回全日本女子サッカー選手権大会でゴールを決めた瞬間

現在、日本の女子サッカーは、一昨年、日本サッカー協会に日本女子連盟として、承認され、登録チームは90以上をこえ、登録外チームも200をこえるであろうといわれています。関東、東海、関西では、それぞれリーグ戦も行われています。また、9月6日には、イギリス、デンマーク、イタリアの強豪チームを招いて、国際女子サッカー招待試合を行い、全日本チームの参加も予定されています。

私自身ボールをけって8年あまり念願の全日本代表でしたが、レベルの高いサッカーを勉強できたことと、サッカーを通して、各々の国々の方と交流できたことは、本当に貴重な体験となりました。すばらしかった香港の日々を、これからの自分自身に、これからサッカーをする女の人たちに、少しでも役に立つように頑張りたいと思います。女子のサッカーもひとつのスポーツとして認められるようになりました。もっともっと多くの女性にボールをける楽しさを味わってほしいと思います。

★9月6日　神戸中央競技場　15時
ポートピア'81国際女子サッカー大会
★FCシスターズ部員募集中　詳しくは神戸FCレディース　☎861―3100まで

中国初の演能

上田　照也

〈観世流職分〉

このたび、初の中国公演を終えて、一行28名は7月4日無事大阪

国際空港へおり立った。

能楽の演劇性を高く評価、支持している欧米では相次いで能楽の外国公演が行われているものの、ようやく今回の中国公演をはじめ香港・韓国など近隣諸国でも公演することができるようになった。数年前より日中両国の各関係方面に根気よく交渉し続けた結果、日本演劇の理解者である〝中国戯劇家協会〟と合意のもとに北京・首都劇場(先年歌舞伎、本年新劇の上演劇場)神戸の友好都市である天津では科学会堂劇場(神戸・天津友好都市の調印をした原名〝人民礼堂〟)大阪府・市と友好都市である上海の芸術劇場で計5回。公演は想像を遙かに上回る好評を得、初公演で大成功を見たことは、我々の努力はもちろんのことであるが、暖かい理解と後援をいただいた関係各位と中国関係者の皆さんより受けた厚意と親切によるもので、大きな感謝とお礼を申し上げたい。

観能対象は中国側の希望もあり文芸、演劇関係者約六千人を招待したが、観能券を入手できず公演回数の少ないことを指摘された。これは能公演と並行して北京と上海で展覧された写真家・大阪芸大講師今駒清則氏による写真展〈能楽の美〉が大きく貢献している。さすがに通行者一日100万人といわれる北京の〝王府井大街〟である流れるような人、人、人、その人達が止まり、眺め、説明を読む。一般の人達は実際に能公演を観ることは不可能であったが〝日本古典芸能に能楽あり〟の認識をした人達が何万人とあるであろう。

隋・唐時代に渡った諸芸能が日本の芸能と交流し、それを源流とする古典芸能とあってこと更親しみを感じたのか、想像以上の客席の反応であった。多くの人達から聞かされた「あの荘厳なまでの緊張は、驚いたり感動である」と言われるように最後の一人が退場するまで息苦しい程の緊張感が客席にただよう。最近の日本ではなかなか出合わない感動であった。

上海の芸術劇場にて

公演に当って、より速やかに、深く理解してもらうため ◎公演パンフレットに詳細な解説と写真をできるだけ多く載せる ◎開演前の解説 ◎舞台横へスライドで曲の場面転換等を映写(京劇の手法) ◎上演中に簡単な場面説明をアナウンスする等の方法をとった。能楽に過度な解説を付加するのは、イマジネーションを限定し、能楽本来の形式をもこわす危惧はもっていたが、言語、風俗習慣の異なる外国での初公演ではやむを得なかった。

しかし「言葉はわからないが内容はよく理解できたし、中国の古典芸能と相通じるものがあって非常に興味を持った」「次回にはもっと言葉を字幕に出して欲しい」等の希望があり、再び観能の意思の伺えたことは誠にうれしいことであった。

とにかく我々が交友した人達は限られた人達であるし、何かと云々するのは僭越であるが彼等は非常に勉強家であり、中国の友人達から受けた厚意と親切、並びに親しさはヨーロッパでは感じなかった感覚であった。これこそ同じ民族の所以なのかも知れない。

なにはともあれ、初の中国公演を大成功に無事終了することができたことを喜んでおります。

●四季のエッセイ――その3

The fascination of summer

吉村　由美
〈随筆家・六甲ジィニヤスカレッジ代表者〉

六甲の白い夏の光り。今年はとりわけグリーンの葉かげが冴えて見える。県立近代美術館を訪れた日も、灼熱の太陽の、激しい季節のゆえか人影も少ない。建物の外部にある長い回廊は、静かな、かげりの空間をつくって、青くさやめく風が吹きすぎる。回廊におかれた白い椅子は、人々のさんざめきを失なって、かげりの深さをあざやかに映して見せる。激しい光彩の中空、そして光りのなかでゆれる樹々の葉。夏のある日の、ひと時によぎる静けさは、また胸に秘めた燃えたつ心を私に告げようとするのであろうか。

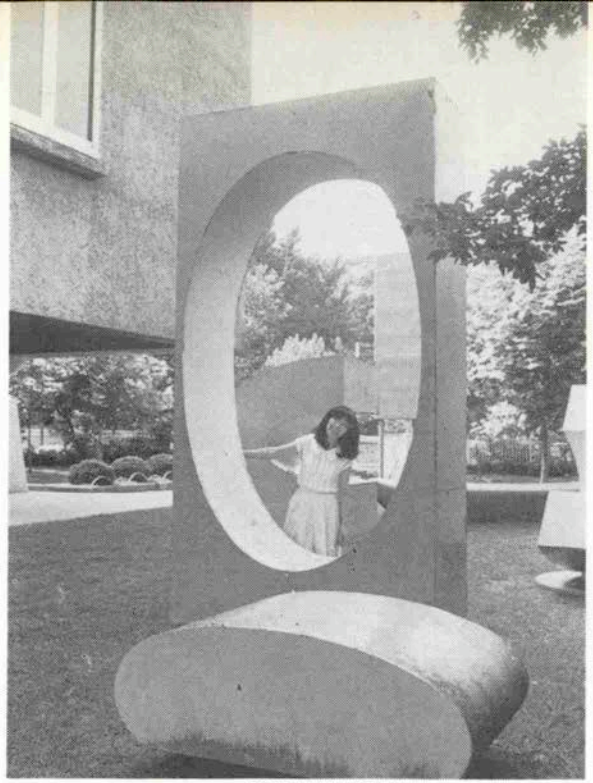
永遠を夢みさせる大空を
眺めよう

と歌ったのはシャルル・ボードレールだが、夏の光りは、その激しさのゆえに、あの青空のかなたに様々な想いをはためかせようと、希いを現実のものにかえさせる、峻烈なエネルギーを秘めている。

やがて真昼の太陽は、アポロンの疾走させる火の車の残照をのこして去りはじめ、たそがれのおぼろげな光りにバラ色の夕もやをかけ、魅惑的なさざめきを映しだす。たとえばロマン派のターナーの絵「水のある風景」にえがかれる詩情の、光りと色彩と、全体を統一する淡い白の幻想性、あの絵の空間は、夕暮れのもつ神秘的な、ときめきとロマンを想わせるようだ。

黄昏よ、いかにお前はやさしく
慕わしいのか。落日の最後の栄光
の上に――眼に見えぬ手が東洋の
遠いかなたから引きよせた重たい
帷――

これは私の好きなボードレールの「パリ風景」の一節、六甲の街路にも少しづつ宵闇のとばりが訪れ、夕もやの優美な女神に代ってサファイアを散らした装いの、夜の騎士が波立つ海を、風わたる空を支配するのだ。自然は人生の厳粛な、そして神聖な時を創造させ、慰さめと安らぎを、また様々な理念へといざなう思索の時を与える。あの夏の光りに向って私は眼をあげる。自らの時をかけた生徒達への希いを、夏の白い輝きの中で、しなやかな熱情に変えてゆくために。



兵庫県立近代美術館にて

受験予備校
六甲ジィニヤスカレッジ
国文学ゼミナール
☎(078)821・4666
(078)843・0460

ある集い・その足あと

たけのこ会

植村　孝一　〈たけのこ会理事長・MAC社長〉

たけのこ会とは最近原宿あたりで出没しているたけのこ族の神戸三宮版ではない。昭和五十年当時神戸も戦後から三十余年経ち、世代交代、近代化への改革等新しい形態への転換期であった。

特に三宮地区は木造家屋から近代的なビル化への改造の真っ只中であった。その頃四名の地元有志が昼食を兼ねながら、近代化がもたらす人間性の損失の失われつつある神戸らしさを懸念し論議を交わしていた。これがきっかけで「神戸らしい専門店として個々の店が自己研鑽に励むと共に、責任と自覚をもって三宮商業地区及び神戸の発展に寄与することを目的とする」を旗じるしに本格的な会発足をしたのが昭和五十一年初秋であった。

3分間スピーチで熱弁の長澤氏（中央）

八名で出発した当会はあくまで勉強会の主旨を貫いている。閉店後夜おそくまで開かれる月一回のマンスリーでは「経営理念の追求」と「社員教育の徹底」の二大柱を会のテーマに白熱討議の連続で若き経営者のバイタリティーが満ち溢れている。すべての出席者に平等の発言を求めるため「三分間スピーチ」なるものを励行している。これは各会員の意見考え方を三分間に絞って、一つのテーマを発表する。最近では効を奏し短かい時間で各人すばらしい発言をしている。また外部団体の主催する勉強会、講演会にも積極的に足を運ぶ事が多い。現在会員数十八名、昨年までは組織作り、内部充実に力を注いでいたが、今年からは外へ向けて活動しようとしている。

その一環として信販大手のライフと提携してクレジット・カード「VIP LIFE 三宮」の発行を始めた。当会十八名の関連店舗五十四店で買い物ができる。最高二十回払いまでの割賦販売で利用者負担は五回払いまで無料。加盟店、消費者先負担の手数料がかなり安くなったのもグループ契約の最大のメリットである。

この会が浮きあがった存在にならぬよう環境に即した行動をとって行き、若い我々で、先駆者的に問題を提起するグループになるのが理想である。

〈たけのこ会名簿〉

長澤　基夫〈㈱ナガサワ文具センター〉
大内　信行〈㈱マルダイ〉
原田　兼嗣〈東京屋〉
岡本　唯延〈岡本宝石〉
植村　孝一〈マック㈱〉
片山　博晶〈美和光芸社㈱〉
渡辺　三船〈レディス渡辺〉
久利　計一〈メガネの大学堂〉
山崎　仁嗣〈㈲東栄弥〉
岸野　恭久〈㈲シンワ洋装店〉
與田美津男〈㈱三和〉
工藤　恭孝〈㈱ジュンク堂書店〉
古川　周二〈陶芸古川軒〉
原田　健一〈J&Rハラダ〉
崔　康　来〈ブティックコーシン〉
杉本　憲一〈㈲タイガー商会〉
太田　恒造〈エビス宝飾店〉
松谷　至博〈㈱紅屋〉

■事務局／㈱マック植村孝一　神戸市中央区三宮町1丁目32－7☎392－1651

□連載エッセイ／私のひろいもの〈32〉

兵庫あなご

竹中　郁〈詩人・絵も〉

「兵庫港」を古風に云うと「兵庫津」になる。百五十年位前ならそれに当る。

一たいどこらが中心で兵庫津が栄えていたのがそれには、あの有名な北風荘右エ門の大店がどこにあったかを考えるとよい。今の七宮神社前、のちに鍛冶屋町角ととなえたところの四つ角にあったものが歴然としているから、まず、米や昆布の浜倉を従えて諸問屋がかたまってあったとみてよい。宮前市場としては海魚の取引もここが一番だったのは、小学生の私が明治末年に学校のゆきもどりにみた風物でよくわかった。

素木の神棚のように磨かれたあなご舟のきれいなのに子供心におどろいた。それほど淡路から明石からくるあなご舟は兵庫の客を大事にしたのだろうか。そんなことを思った。

宮前には「魚善」という店が東と西とに分れてあって、あなご料理を看板にした。特に東魚善の「蒸しあなご」は大きな土瓶のような容れものにいれて売って名高かった。

こんな有力な二軒を相手に、色町として栄えはじめてきた柳原の中の「青辰」があなごの仕入れ競争の仲間へ加わった。今の「青辰」の二代前のころの話になる。

何しろあなごに関しては口の肥えた兵庫の客を相手のこと、とびぬけて良物を売るには、「青辰の一本釣りあなご」といわれるくらいのものを仕込まぬことには成立たない。

柳原には「奈良屋」という大きな芸者屋があって、当時の兵庫県令伊藤博文があそびに来た。博文も青辰を味わったにちがいない。いまや兵庫のシンボルは柳原というようであった。それまでの色町は佐比江だったのだ。とにかく、芸者屋やお茶屋へ青辰の鉢がかつぎこまれていった。花隈や福原が栄えてきたのはそのあとのこと、新開地一

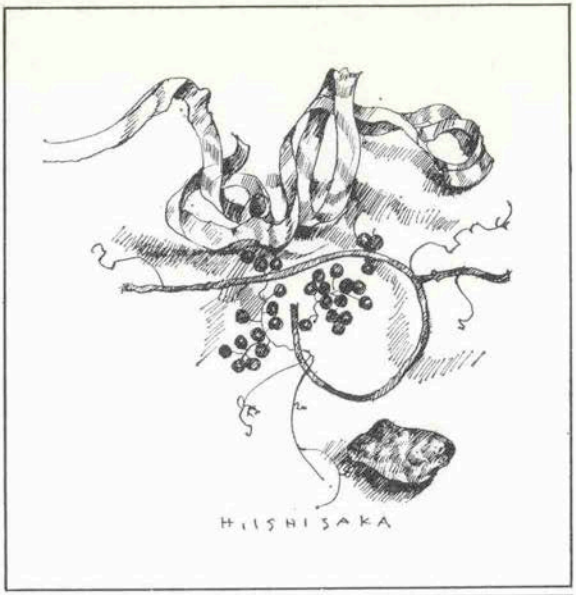
帯がさかり場になったのは大正も五年か六年になってからだった。

兵庫津の芝居小屋でふるいのは、柳原の柳座の以前に、兵庫の人が「村の芝居」とよびならわした算所町の朝日座。そのころは北に弁天の森をひかえていたので弁天座といったらしい。宮前浜の繁栄のこぼれがそこらにちらばっていった。学者の藤田積中の宅が、そのちょうど中程の富屋町の長傳寺裏にあったのもその一つだろう。そこからあまり遠くない南仲町には琴の中島大検校が門構えの三階建で自家用人力車二台をおいてくらしていた。この人は後の宮城道雄を仕込んだ人である。一方は細格子の町家、一方は武家風のかまえ。当時の兵庫の文化程度がいくらかはしれる存在だ。

青辰はこんな家へもその鉢を出入りさしていたにちがいない。柳原の福厳寺横町の古びた小店だった青辰。

戦後、元町へ店をひらいてからは、ひるまもほんの三時間の商売になってしまった。あなごの数量が足りなくなったせいだ。うまいという評判の上にそんな条件がかさなって、ここの兄弟がよく云う「先祖と競争してまんねん」という通りのありさまになって、今日に至った。

兵庫人があなごを好くかぎり、この跡取りのない店の三時間かぎりの商売はつづく。「兵庫あなご」とはいうが神戸あなごとはいわない。神戸なら「神戸牛肉」だ。あなごが兵庫人にとって誇りとして受けつがれてきたのは、その美味が第一番なのは勿論だが、魚善や青辰のような店があったからにも依る。



連載エッセイ
折々の神戸〈V〉

ディオニュソスの国にて

多田 智満子〈詩人〉
絵／石阪 春生

思いがけなくギリシァ観光局のお招きにあずかり梅雨の最中の日本をぬけ出してしばし白日乾燥のギリシァに遊ぶことができた。昨秋、『蓮喰いびと』という詩集を上梓した御縁で、ホメーロスのうたった《蓮喰いびと》の本国を訪ねた、といえばきこえはよいが、一介の詩人がこんな僥倖にめぐまれるのはひとえにギリシァ政府が観光に力を入れているおかげである。

何しろ子供の頃からのギリシァ好きで、マンガ的に在日ヘレニストを自称していたくらいだからギリシァ人がギリシァ語を話しているというだけで感激するのだし、街頭の看板や標識を眺めてたまに読めるのがあるとニコニコしてしまう。われながらかわいらしいものだった。

もっとも私の散慢な頭に、迷子のようにまぎれこんでいるコマギレのギリシァ語はみな古典時代のものなので、現代ギリシァ語からは当然すっかりズレてしまっている。地名ひとつにしても、格調正しくアテーナイなどと呼ぶのは時代錯誤なので、今やこの国の首都はアティネ(むしろアシネ)と発音されている。

観光局のお役人やホテルの受付係などは英語もフランス語も流暢に話すので会話に不自由することはないけれども、一般の人たちはギリシァ語しか話せない。カタコト英語が関の山である。そこでやむをえず、向うの英語にまさるとも劣らぬカタコトの古典ギリシァ語を動員してみるが、これももちろんうまくいかない。向うにしてみれば変な日本人がどうやら二千年も昔の古語を口走っているわけで、さぞや珍妙な図であったろう。

日本人といえば私は外国へ行くと必ず日本人と見抜かれてしまう。眼鏡もカメラも身につけてい

ないのに、いまだかって中国人や東南アジア人とまちがえられたことがなく、自分でもふしぎだと思っている。ギリシァでも御多分に洩れず、私は正札つきの日本人であって、ホテルのボーイがこんなことを話しかけてきた。

——ぼく、日本に行ったことがありますよ。カシマとモジ。

——船で？

——そう船で。日本はいい国ですね。田舎がきれいだ。

——私、神戸に住んでいるのよ。神戸って知ってますか？

——名前は知ってる。行ったことありません。

バーのバーテンも、やはり船で日本へ行ったという。マエバシに友達がいるのだそうである。

三人目にやっと神戸を知っている若者にめぐりあった。コルフ島の、やはりホテルの食堂のボーイだ。元町の名を思い出すのに骨を折っていた。

——モトマシ？　モタマシ？

——元町でしょう。

——そうそう、モトマチ。

元町の外人バーあたりで飲んだことがあるのかもしれない。

——湯の中にうす切りの牛肉入れる料理、おいしいですね。あれ、何といいますか？

——シャブシャブでしょ。

——そう、シャブシャブ。シャブシャブ。

シャブシャブという音をまるで波の音のようにひびかせながら、彼は遠くを見る目つきをした。

ギリシァは海国だから船乗りが多いのは当然として、食堂のボーイたちは、臨時の水夫になるのか、船で皿洗いなどしながら世界見物でもするのであろうか。

ギリシァの暑さは想像以上で、日本の本州よりも緯度が高いのに、七月初めですでに連日三十四度を超した。もっとも湿気が少く、むしあつさはない。雨の全く降らぬカンカン照りがつづいて、なるほど荒地や岩山が多いのもあたりまえと思われた。こんな風土からみれば、湿潤の日本の緑の山野はみずみずしく美しく見えるであろう。「田舎がきれいだ」というボーイのことばがくりかえし思い出された。

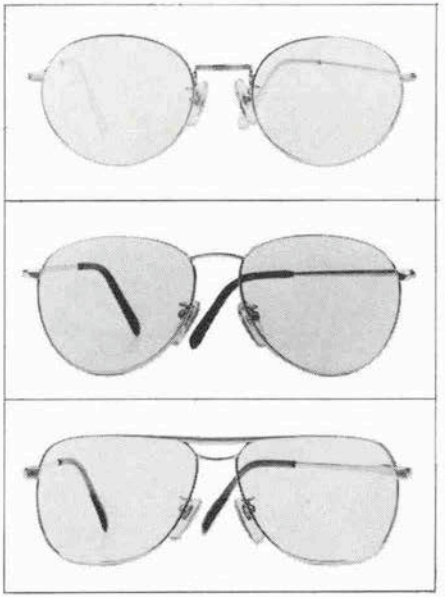
アテネに着いた当日、アクロポリスの丘に登ったが、ちょうど日盛りでもあり、長時間の飛行のあとで疲れてもいたので、ぎらぎらと陽光を反射するまっしろい石の廃墟はひたすらに暑くまばゆく、とても心しずかに永遠に思いを致すどころの話ではなかった。パルテノン神殿の下のヘロデス・アティクスの音楽堂などは、石の円型の階段座席が巨大な凹面鏡のような熱射板としか思われなかったほどだ。

数日後、「ディオニュソス」という料亭（タベルナ）で一夕を過したが、ここのテラスからはアクロポリスの丘が最もよい角度から眺められた。涼しい夕風に吹かれながら、ディオニュソスの恵み給うた紅の美酒の盃を傾けていると、夕闇に沈んだパルテノンが、時おりほどよい照明をうけて、幻想的な列柱をぼうっと白く浮びあがらせる。真昼のパルテノンの焦熱地獄を味わっただけに、この絶景は夢のようで、まさに神話の恍惚の蓮を喰らった人のごとく、ふるさと日本も神戸も忘じ果てる思いであった。

ハイセンスな紳士服で
最高のおしゃれを

三恵洋服店
神戸・元町４丁目 ☎(078)341—7290

メガネに関するあらゆるご要望に
お応えします



メタルフレーム
機能性、堅牢さ、広い視野、そして軽〜いフェザー感覚でデザインもシンプルなフレームです

神戸眼鏡院

元町店・元町３丁目 ☎(321)1212代表
三宮店・さんちかタウン ☎(391)1874〜5
元町店は毎水曜日がお休みです
三宮店は第２、３水曜日がお休みです